



作家  
元国際線乗務員  
**黒木安馬**

【プロフィール】高校時に米国留学後、早稲田大学を経てJAL国際線客室乗務員として30年勤務。世界初の「カラオケ・フライト」や「1万メートル上空・北島三郎機上コンサート」などを実現させる。千葉の自宅は1300坪の山林を開墾してプール、テニスコート、コンサートホール等を手作りする。現在、(株)日本成功学会社長として自己啓発や社員教育で講演中。著書に『ファーストクラスの心配り』、『あなたの人格以上は売れない!』(プレジデント社)、『成「幸」学』(講談社)、『出過ぎる杭は打ちにくい!』(サンマーク出版)、『面白くなくちゃ人生じゃない!』(ロングセラーズ)、『小説・球磨川』(上下巻・ワニブックス)、『雲の上で出会った超一流の仕事の言葉』(あさ出版)などがある。  
E-mail:yasuma@myad.jp URL:http://www.7b.biglobe.ne.jp/~sanpercent-club/

21世紀だ! ————— 人生・農業リセット再出発 257

## 鉄道の父・井上勝【長州 FIVE】

**鉄**道の父が誰なのか即答できる人はほぼいない。東京駅丸の内北口で赤レンガ駅を見据える銅像が立っている。彼は、初代総理大臣・伊藤博文と出自経歴も一緒の偉大な仲間の一人なのだ。明治維新4年後の1872年10月14日は新橋～横浜間に日本最初の鉄道が開通した日で、今年で150年。井上勝(野村弥吉)は“鉄道の父”として知られる。山口県知事の依頼で2回講演し、伊藤博文から安倍晋三まで総理大臣を8人も輩出している長州・山口に興味があった。薩摩と手を握って幕府を倒すパワーはどこから来たのか? 国禁の海外密航は死罪にもかかわらず、それも外国を撃ち払う尊王攘夷の長州藩が関門海峡を通過する英・仏・蘭・米の列強四国の艦船を砲撃している1863年下関戦争、その日の夜に「敵を知り己を知らば百戦危うからず」と、長州藩主は“長州ファイブ”と呼ばれる青年5人を5年間のイギリス留学へ横浜から密航させる真逆を実行する。長州や薩摩藩は、倒幕して日本を作り直さなければ清国みたいにイギリスの植民地になると恐れを抱いた。西洋の高度技術を身につけて“人の器械”となり、帰国後に国の強化に役立って攘夷が可能になるという“大攘夷”の考え方。

**井**上勝は藩校の明倫館校長を務める父の3男として萩で育ち、地元の吉田松陰「松下村塾」は下級武士対象だったので明倫館で勉強、父が江戸湾相模警備隊長に赴任し、13歳で同行する。長崎で洋学、江戸と箱館で西洋航海術の腕を磨き、長州藩が英国船を購入して21歳の勝を船長に抜擢するが、直ぐに藩主から英国留学を命じられる。のちに【長州 FIVE】と呼ばれた留学生は5人、貧農の息子から初代内閣総理大臣になる伊藤博文、初代外務大臣の井上馨、造船の父になる山

尾庸三、造幣の父になる遠藤謹助。勝と山尾の2人だけが5年間の留学を終了し、中途帰国して高官になっていた伊藤に招聘される。留学先のロンドン大学には【CHOSHU FIVE】の顕彰碑が建てられ、サムライ5名はそれぞれの「父」として銘記されている。

**鉄**道敷設を任された勝は、羽織ハカマに陣笠と草履で測量にあっていた者たちに西洋の仕事着を与え、自らもツルハシを担いで日本初の鉄道・新橋⇄横浜間29kmを1872年に開通させ、東海道本線397km、1891年に青森まで東北本線を完成させる。21年間もトップを務め、鉄道養成所や国産の汽車製造工場も手掛けた。余談だが、痩せた土地の大規模開墾で岩手山麓に日本鉄道・小野、三菱・岩崎、井上勝3名の頭文字の「小岩井農場」も作る。

**明**治維新5年前の1863年、横浜から船で4カ月以上もかけてロンドンに到着した5人は、留学費用5,000両(3億2,000万円)も払っているのに貧弱な英会話で、渡英目的を聞かれて海軍「NAVY」の研修希望と言うべき単語を航海術「NAVIGATION」と間違えたため、毎日最下層船員と同じ重労働をさせられ、到着時の姿は「飢えたカラスの様だった」と記録にある。1909年、盟友の伊藤博文が中国ハルピンで暗殺され、勝は青春の思い出ロンドンへ向かう。当時21歳と一番若かった勝も66歳になっていた。「自分の生命は鉄道を以て始まり、鉄道を以て老い、鉄道を以て終わる」が口癖、肝臓病を患っていた勝は、お世話になったウイリアムソン教授夫人に付き添われて静かに息を引き取り、荼毘に付された。疾風怒濤の明治維新を駆け抜けて今日の日本の礎をつくった【長州 FIVE】英傑に、感謝、合掌である。